

高麗寺跡第8次発掘調査現地説明会資料

所在地名	木津川市山城町上狹高麗寺・森ノ前 地内
調査主体	木津川市教育委員会（教育長 久保 三左男）
調査契機	史跡整備に伴う発掘調査、市内遺跡発掘調査（平成19年度国庫補助事業）
調査指導	高麗寺跡史跡整備委員会（会長 上原真人）
調査期間	平成19年9月3日～12月15日（予定）
調査面積	約400m ²

1. 調査の目的と経過

今回の発掘調査は、高麗寺跡（飛鳥時代創建、国史跡）の史跡整備に伴なう第1期調査の3年目にあたり、昭和59～63年（1984～88）度に旧山城町が実施した寺域の範囲確認調査（第1期調査）から数えて、高麗寺跡の第8次調査となります。なお、昭和13年（1938）にも2度の発掘調査（第1期調査）が行われ、その成果を受けて昭和15年（1940）8月30日、回廊に囲まれた主要堂塔を含む伽藍の一部が国の史跡となりました。

この調査では、ようやく緒についた高麗寺跡の史跡整備を行うまでの基礎資料の収集を目的としており、昨年の第7次調査でその一部を検出した南門跡の全容解明と南辺築地跡東方の位置確認や東辺回廊跡の確認調査を行っています。

2. 調査の概要

高麗寺の伽藍整備は7世紀後半になされますが、創建は古く7世紀初頭にさかのぼります。伽藍の主要堂塔は、東に塔、西に金堂を並置し、それを囲む回廊が北で講堂、南で中門に接続するいわゆる法起寺式の伽藍配置となっています。第6次調査では、北辺回廊基壇外側から南辺回廊基壇外側までの規模がほぼ200尺（0.297m/尺、唐尺）で設計されていることがわかり、すでに判明している回廊の東西規模201尺とあわせ、整然と計画された高麗寺の伽藍設計を知ることとなり、昨年度の第7次調査では、南門跡検出の手がかりを得たのです。

3. 調査成果のまとめと課題

南門・中門・金堂が一直線に並ぶ特異な伽藍配置が確定

南門跡は、桁行20尺（5.94m）×梁間12尺（3.56m）の鴟尾を飾った切妻造り屋根をもつ八脚門で、扉の付く中間は8尺（2.38m）幅であることが判りました。礎石は12個中3個が遺存しており、金堂の南北中軸線上に開かれていたことが解ります。なお、南門の北側には、中門へ続く幅6尺（1.78m）の石敷も出土しており、南門・中門・金堂が一直線に並ぶ配置となります。

そもそも高麗寺の伽藍整備は、天智朝の川原寺創建軒瓦との同范品を用いて 7 世紀後半(660 年代)に行われますが、この範はその後移動して大津宮周辺の寺院に使用されます。したがって、高麗寺は、川原寺式伽藍配置から法起寺式伽藍配置へ変化するその初例と考えられ、当然、中門・南門の位置も、東西回廊の中央を通る中軸線上に位置すると考えられていました。高麗寺においては、中門・南門が西側へ寄る地形的な制約はなく、シンメトリーを崩してまで行わなければならないなんらかの意図があつたと考えられます。

飛鳥時代高麗寺の様相解明の糸口か

高麗寺が創建された飛鳥時代、七堂伽藍を完備した寺院は、全国に飛鳥寺以外なく、一・二堂程度で構成された捨宅寺院、草堂段階であったと考えられます。現在まで、創建期の高麗寺に関する遺構は検出できており、南門・中門・金堂が一直線に並ぶ配置は、宗教的理由から金堂を重視したものと解釈できますが、それ以上に、創建期の高麗寺の状況が、何らかの形で反映しているものと考えられます。

今回の調査では、飛鳥寺創建期軒瓦との同范品がほぼ完全な状態で出土しており、変則的な伽藍配置の状況からも、創建期高麗寺の様相解明の糸口になると言えましょう。

最古の築地塀跡を良好な状態で検出

今回の発掘調査では、特に南辺築地跡が極めて良好な状態で出土しました。奈良時代の 8 世紀代では寺院の外画施設としての築地塀は一般的になりますが、7 世紀代では確実に築地塀が構築された例は検出できていません。官の大寺においても一本柱塀が用いられ、確実な築地塀の検出では、今回の高麗寺南辺築地が最古の遺例となります。高麗寺以外では、飛鳥寺南辺や川原寺南辺・東辺で築地塀が構築された可能性が指摘されているにすぎません。

高麗寺における検出状況は、段丘縁辺部に構築された築地塀が内側に崩れ落ちた状態で出土しており、屋根に葺かれた旧状を知ることができます。出土瓦からは、確実に高麗寺伽藍整備期の 7 世紀後半段階のものであり、最古の遺例としては良好な状態での出土と言えましょう。